

#10

セイセキ

聖蹟人

theme

はずむ人

胸にひめた好奇心を育てよう。
聖蹟桜ヶ丘には
心も体もはずむ夏がある。

Take
Free



毛利 康秀さん

観光社会学、コンテンツツーリズム論を専門とし、大学で教鞭を取る。ファンサイトを作るほど熱心な「耳をすませば」ファンでもある。せいせき観光まちづくり会議メンバーとして、地域の取り組みにも関わる。

※耳すま：映画「耳をすませば」の俗称。

※コンテンツツーリズム：映画やドラマ、アニメなどの作品（コンテンツ）のロケ地やモデル地になった場所を訪れる観光（ツーリズム）。

「耳をすませば」とは？

1995年公開、スタジオジブリ制作のアニメーション映画。柊あおいによる同名の少女漫画を原作に、脚本・絵コンテ：宮崎駿、監督：近藤喜文で制作。中学3年生の月島雫が、図書カードに繰り返し記された名前の主・天沢聖司と出会い、進路と恋に向き合う姿を描く。



6月に開催！
多くの人が来場した
出演者トークショー



訪れる人は今なお増え続ける データと読み解く 聖蹟桜ヶ丘と「耳すま」の30年

映画公開から30年。聖蹟桜ヶ丘は「耳すまのまち」として今なお人気を集めている。コンテンツツーリズムを研究する毛利康秀さんに、話をうかがった。

Interview、Text：Akira Andoh / Photo：Yufumi Omori

データが語る 世代交代するファンたち

「30歳以下が多数派。当時のファンはもう少数派なんです」。そう語るのは、せいせき観光まちづくり会議のメンバーで、コンテ

ンツツーリズム研究者でもある毛利康秀さんだ。1996年にファンサイトを作り、まちと作品の関係を30年見つめ続けてきた。「私も公開時に、当時気になっていた女性と観に行きました(笑)。今振り返ってもいい思い出ですね。『耳をすませば』は

それまでのジブリ作品と異なり、完全ファンタジーではなく多摩エリアという日常の中で展開されます。それがここまで人を惹きつけるのでしょう」

毛利さんが2013、2018、2025年の3度にわたって実施した調査では、聖蹟桜ヶ丘



6月14日に行われた、『耳をすませば』出演者トークショー。観覧無料で、事前抽選により180名が招待された。月島雫役の本名陽子さん、杉村役の中島義実さん、原田タ子役の佳山麻衣子さんが登壇。なんと、この3名が一堂に会するのは、当時のアフレコ収録以来、初だというのだから驚き。同窓会のような雰囲気、トークショーは進行。6月1～14日までは、『耳をすませば』と「雫の住む街」パネル展も開催された。



6月2～7日には、多摩市立関戸公民館ギャラリーにて、『耳をすませば』の監督でもある近藤喜文氏の展示が開催。新潟県出身の近藤氏の展示が多摩市で行われるのは初めて。せいせき観光まちづくり会議が主催した。

を訪問する「耳をすませば」ファンの女性比率は6割、6割、7割と推移。コンテンツツーリズム界では異例の傾向だ。『らき☆すた』をはじめとして、『ラブライブ!』『アイドルマスター』など、他のアニメ作品が聖地巡礼の題材になることはありますが、男性ファンが多数を占めるのが一般的です。でも『耳をすませば』はそうではないんですね」

年齢構成にも特徴がある。多数派は30歳以下、公開当時リアルタイムで観ることができた世代の41歳以上は1割に満たない。新しい世代が継続的に流入していることが、データで裏付けられる。

聖蹟桜ヶ丘が「耳すまのまち」として動き出したのは、公開から10年が過ぎた2005年だった。多摩大学の学生による10周年記念イベントの提案を桜ヶ丘商店会連合会が引き受け、スタジオジブリの了解のもと実現した。「公開から10年間は、まちの動きはほぼなく、ファンが個別に訪れているのみ。2005年の上映会をきっかけに、商店街もまちおこしと結びつけていきました」。奇しくも同じ2005年、国土交通省の白書に「コンテンツツーリズム」と

いう言葉が初めて登場。地元の動きと新しい概念の誕生が、時を同じくしていた。

以降、駅メロディの導入は2012年、青春のポストや巡礼マップの整備も並行して進む。本名陽子さんによる「せいせきハートフルコンサート」は10周年からコロナ禍の中止を除いて毎年継続。今年6月の出演者トークショーには、定員180名に対し1,000名以上の応募が殺到した。

毛利さんが指摘するのは、スタジオジブリが作品以外においては積極的に関与しないことだ。キャラクターを活用したキャンペーンやコラボグッズなどを展開できない。でも、今も人が押し寄せる。「他の聖地は制作会社が積極的に商品展開して観光に寄与している。『耳をすませば』はそれがないのに、これだけ人が集まる。多分、他に例がないと思います」

同じ時期に同じ多摩を舞台にしながら、1994年公開の『平成狸合戦ぽんぽこ』は対照的だ。「作品としては名作ですが、聖地巡礼が流行ることはない。主人公が成長するわけでもなく、たぬきが負ける話で、感情移入する要素が少ないんです」毛利さんは作品の人気の30年続いた要因

を、スタジオジブリ作品というブランド力、作品自体の魅力、金曜ロードショーが2、3年おきに繰り返すプッシュ型の露出効果、首都圏に位置する多摩市のほどよいアクセス性、地域愛の5つに見ている。実際、作品に惹かれて聖蹟桜ヶ丘に移住し、根付いていく人もいる。一本の映画がまちの自画像になるまでには、作品そのものの力と、それを支え続けた人々の働きかけがある。データの向こうに見えてくるのは、作品とまちとファンが、ゆっくりと結ばれていく軌跡だ。

最後に、毛利さんに聖蹟桜ヶ丘というまちについて聞いてみた。「移住者が多いのでいろんなルーツを持つ人が集まっているのに、地域への愛着が育まれ、やさしいつながりが生まれている。それが大きな魅力だと思っています」

せいせき観光まちづくり会議

東京都多摩市聖蹟桜ヶ丘の観光や文化振興を推進する市民団体。桜ヶ丘商店会連合会の関係者をはじめ、有志メンバーが集まる。

📍 多摩市関戸 2-24-14-304

(桜ヶ丘商店会連合会内)

☎ 042-373-5869 <https://seiseki.tokyo>



ランチで人気のサラダサービスは、今年の春からスタート。女性を中心に好評を得ているのだとか。カレーの人気は、2種がけ。「ウマ辛キーマ」と「スパイスチキン」は定番だけどオーダー率高めなのだそうです。ワインのラインナップも豊富。「ワインとカレーって合うんです。ぜひ一度試してみてください!」

SEISEKI
PEOPLE 2



カレーを愛する店主が提供!

オリジナル調合のスパイスが香る、笑顔と会話がはずむ一皿

「カレーの種類が豊富!」「ランチサラダがおいしい!」など、まちの人たちの間でも話題のお店マドレ。カレー好きの店主が作る至極の一皿のヒミツに迫る!

Photo : KAEDEsign

フレンチ×スパイスで 創り出す、魅惑の味

店に入ると、スパイス香るカレーのいい匂いが漂う。はずむような笑顔で出迎えてくれるのは、店主の松本一平さんだ。大阪の飲食店で働いていた松本さんは、東京出店のために上司とともに上京。そこで縁があり、ここ聖蹟桜ヶ丘の地でお店を開くこととなる。「このお店は、コロナ禍真っ只中にオープンしたんです。なかなか営業しづらい時期でしたが、そんな中でもできることをやり続けていましたね」スペインバルから始めたこのお店は、現在はランチはカレー、ディナーはスパイス料理とワインを楽しめるお店に。「僕、カレーが好きなんです! 毎日でも

食べられるくらい(笑)」。そんな松本さんの深いカレー愛から作られた一皿は、10種程度のオリジナル調合のスパイスが入り、どれも味わい深い。カレー2種や3種のあいかけも人気で、単品で味わってから混ぜたり、付け合わせを加えて食べるのがおすすめとのこと。

松本さんは中学生の時に料理人を志し、フランス料理からキャリアをスタート。そのフレンチのエッセンスとスパイスが混ざり合っている。「フランス料理っていろんな調理技術が網羅されているんですよ。ひとつの食材に対して、何十、何百ものアプローチ法がある。そこに興味を持ちました」

関西出身の気質なのか、ほがらかな雰囲気です。松本さんは語る。お店を運営する

松本 一平さん

大阪府出身。2020年5月に聖蹟桜ヶ丘にマドレをオープン。スペインバルからスタートし、試行錯誤ののち、ランチは自分の好物でもあるカレーがメイン、夜はスパイス酒場の形態に。2児の父でもあり、自宅でも食事担当なのだそうです。

うえて、自身やスタッフ間でも笑顔を大切にしているのだそう。「お店に来てくれた方には、楽しんで帰っていただきたいですから。それから、ありがとうという気持ちをどう還元していくかは常に考えています。おいしい料理や、いい接客。お客さんだけではなく、スタッフや家族、自分を支えてくれるまわりの人たちへの感謝の気持ちは忘れずに。きっと巡り巡って自分に返ってくると思うので」

Madre

● 多摩市関戸 2-37-3 さくらゲート 1F
☎ ランチ (11:30~15:00)、
ディナー (18:00~22:00、土日 17:00~22:00)
休: 月、不定休 ☎ 042-400-7108
https://www.instagram.com/madre_seiseki.official/

大人も子どもも！体をはずませて楽しむ

“ベース”を育む、体操×体幹トレーニング！

マットの上で飛んだり跳ねたり。体操×体幹トレーニングスタジオ THE BASE

オーナーの落井達彦さんに、指導で大切にしていることをうかがった。

Interview, Text : Hisaco Sato / Photo : Yufumi Omori

落井 達彦さん

運動指導歴20年、体操競技歴6年。全米認定のトレーナー資格も多数取得。現在もトレーナーとして学び続けている。2児の父。

体の土台作りを通して、 地域の人々に寄り添う

オーナーの落井さんは、24歳で独立して以来、20年以上にわたりパーソナルトレーナーやフィジカルトレーナーとして運動指導に携わってきた。以前から、自らの体操競技とトレーナー経験を地域の子どもたちへ伝えられる場所をつくりたいと考え、聖蹟桜ヶ丘に「THE BASE」をオープン。「病院では一人ひとりに合わせた治療を受けられますが、運動では自分に合った方法を知らずに始める方が多いと感じていました」と話す落井さん。

特に力を入れているのは、幼児期から10代にかけての運動学習だ。この時期に

身につけた体の使い方は、自転車に乗れるようになるのと同じく、大人になっても自然と体に残り、一生の財産になるという。遊びの要素を取り入れながら、楽しんで体を動かす中で、基礎的な動きが自然と身につくように工夫している。

レッスンは少人数制を重視し、指導の質と安全性を保ちながら、それぞれの成長に合わせてサポートしている。運動に苦手意識を持つ子どもも少なくない。そんな子どもたちに落井さんが伝えているのは、「できない」のではなく、「まだできていないだけ」という言葉だ。小さな成功体験を積み重ねながら、自信を育み、「できた」という喜びにつなげていく。子どもだけで

なく、大人のレッスンでも、腰痛や肩こり、運動不足などの悩み丁寧に対応している。受講生から「技ができるようになった!」「スポーツで活躍できた」「痛みが改善された」という声を聞き、人生の大切な1ページに関われていることにやりがいを感じているという。これからもスタジオ名の「土台・基地」として、地域の人々が元気に体を動かせる場所となるよう、寄り添い続けていく。

THE BASE

📍 多摩市関戸2-32-1 プリメーラ多摩2F

🕒 レッスン：月 13:00 ~ 21:00

水・金 11:00 ~ 21:05、土 9:45 ~ 20:00

☎ 080-2127-9644

<https://www.studio-thebase.com>



オープンして3年目を迎える、当スタジオ。一歩足を踏み入れると、色とりどりのバランスボールや白いマットが目を引く、開放的な空間が広がる。今回お邪魔したのは小1~小3向けのクラス。ウォーミングアップから動体視力を鍛えるトレーニング、側転や跳び箱など1レッスンの内容は豊富だ。1クラス8人を上限としており、子どもたちの名前を呼びながら、落井さんが手厚くサポート。



農家のご飯ってどんな感じ？

朝採れ野菜を使った “農家料理”を体感できる場所

鳥のさえずりが響き、虫も元気に活動する。豊かな自然を感じる多摩市和田で、畑と農家レストランを営む青木幸子さんから、野菜の魅力を学んできた！

Interview : Yuko Miyake, Mizuho Iwasaki / Photo : Yufumi Omori



SEISEKI
PEOPLE

4

青木 幸子さん

多摩市に住んで40年ほど。結婚後もなく夫の両親の農園を引き継ぐことになる。育児や介護の合間をぬって、農業を学ぶ。自分の畑で採れた野菜を使った料理を提供する、農家レストランも経営。



【写真上】季節によって替わる、ランチプレート。何種類も野菜を使い、さまざまな調理法で作り上げられた料理が一皿に。【中】木の温もりを感じる店内。【下左】実は何十種類と品種があるというトマト。他の農家さんの野菜も販売。【下右】収穫した旬の果樹ジュースは大人気！

丹精込めて作った野菜は、生でもおいしい！旬のおいしさを伝えたい

自分たちの住まいを活用して、農家レストランを経営している青木幸子さん。家のすぐ裏には、木々が生き茂り、思わず息を深く吸い込みたくなるような清々しさだ。「野菜って面白いんですよ。例えばトマト。青臭くて苦手という人に黄色いトマトを食べてもらおうとフルーティでびっくりされる。トマトの良さを伝えるのが得意なんです（笑）」と話す青木さん。夫の両親の介護が始まったことで畑を継ぐことになり、農業の講習に奔走することになった。 「明確な引き継ぎがなかったもので、当時は苦労しました。今は、朝野菜を採って、レストランで出す料理を作る。お店を片付けたら草むしり。毎日続くのは大変だけど、旬の野菜を皆さんに食べてもらいたいという想いが強いですね」。野菜の無人販売

も好評で、すぐ売り切れに。近所に住むおじいさんに「おいしい野菜だね、がんばってね」と声をかけられたり、料金とともに手紙が入っていることもある。その言葉で疲れが吹き飛ぶのだそう。

「私は、野菜のおいしさは、色と香り、食感だと思っています。だから、その日採れた野菜を見て、炒め物にしよう、スープにしようなど考えて作っています」

青木農園で作られる70種ほどの野菜から作られたランチプレートは、主菜やサラダ、副菜などが10種以上盛り込まれ、彩り豊か。お弁当の販売もあり、数が少ないため、問い合わせるのがおすすめ。また、お弁当の包みも自然にやさしいものにこだわっているのだそう。

流れのままに関わるようになった農業は、

いまや青木さんの“好きなもの”に。「自分がおいしいと思うものを食べたいし、提供したい。私の料理で“食べることは楽しいこと”と感じてもらえれば。そのために、これからも自分の野菜を作っていきたいですね」



青木農園

多摩市和田 1709

12:00～15:00 休：月～水、不定休

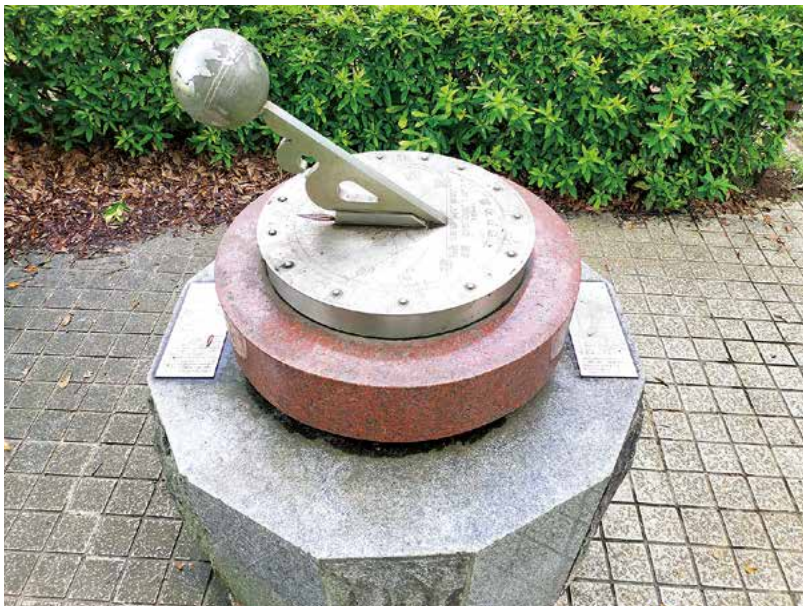
070-9033-0831 ※イートインは要予約

※お弁当は要電話問い合わせ

あれ気になる??
歩いて見つけた

セイセキの珍光景

Text, Photo: Utaha Nishihama



今回のリニューアルで誕生した遊具は、車イスの人でも乗り移りやすい幅の広いすべり台・モーグルヒルなど、さまざま。子どもだけではなく大人も、市民のアイデアが詰まった広場を散歩してみるのもおすすめ。普段、デジタルな数字に追われている人ほど、広場近くの日時計を見ながら、時が刻まれるのを感じてみて。



日の動きを見ながら宇宙に想いを

今年の3月に大谷戸公園に「みんなの広場」が誕生した。この広場はあらゆる人が安心して楽しむことができるインクルーシブ広場として設計され、近隣の連光寺小学校の子どもたちや都立多摩桜の丘学園などの地域の方の意見を取り入れて作られた。大谷戸公園に新たな魅力が生まれ、よりにぎわいのある場所になっている。そんな「みんなの広場」の近くに不思議なおブジェのようなものがある。この一見おブジェのようなものの正体は、実は日時計。日時計とは、一日の太陽の動きにあわせて動く影で時間を表す時計であり、紀元前5000年ごろから使われている。大谷戸公園の日時計は、時計盤の上に緯度と同じ角度の指針が付けられ、指針の先の地球儀が北を向くという凝ったつくりになっている。ぜひ太陽の光と移ろう影を眺めながら、宇宙に思いを馳せてみてはいかがだろうか。

セイセキ歴史Walk

Text: Satomi Yoshioka

#9

幕末に出現! 「侠客」一ノ宮万平とは?

男気あふれる生き方に、多くの仲間が信頼を寄せた

幕府の権威が弱まっていた江戸末期、関東を中心に現れた「侠客」※1が勢力をもち始めます。多摩地域の侠客として有名なのが、「関戸の親分」とも呼ばれた、一ノ宮万平(本名は杉本万平。安永8年(1779)~文久3年(1863))。彼は一ノ宮~関戸、八王子市周辺を拠点に、博打の金貸しとして、縄張り仕切っていました。博打や喧嘩をする一方で、地域の揉め事を解決したり、小野神社の相撲の興行、祭りや行事を手伝うなど、地元貢献することもあったそう。また、晩年は、抗争で亡くなった人々の供養のためと伝わる「万平地蔵」※2を宝泉院に建立。さらに壽徳寺には「六地藏」、小野神社の近くに「馬頭観音」を安置するなど、単なる博徒ではなく、地域とのつながりを大切にしていた人物だったとも考えられます。

それを裏付けるのが、明治の落語家・三遊亭円朝師匠の言葉です。万平親分を登場させた人情噺※3に親分の人となりに関する記述もあり、「名高い侠客(おとこで)※4であつたと評価しています。なお、今春放映されたアニメ※5に、なんと万平親分が登場。ヒロインを助ける姿は、まさに「弱きを助け強きをくじく」侠客そのもの。まさか自分がアニメのキャラクターになろうとは……親分も驚いているのではないのでしょうか。

※1博打を打って生活する者。正義と仁義を守り通すことを建て前とする。※2亀跌(きふ)と呼ばれる亀の台座に乗った珍しい地藏座像。※3明治22年(1889年)『熱海土産温泉泉利書(あたみみやげいでゆのききがき)』。※4義侠心を持ち、弱きを助け強きをくじく人物をいう。※5「ゴーストコンサート: missing Songs」

参考資料:企画展「幕末任侠伝 一ノ宮万平とその時代(2011年。バルテノン多摩)」展示図録、博徒の幕末維新(ちくま学芸文庫)「清水次郎長 一 幕末維新と博徒の世界(岩波新書)(岩波新書 新赤版 1229)」/高橋 敏



『幕末任侠伝～
一ノ宮万平とその時代～』
(表紙画像)
バルテノン多摩発行・
写真提供



多摩市史 通史編1 自然環境 植物・動物 原始および古代 中世・近世/第五編 中世/第一章 鎌倉時代/第二節 鎌倉幕府成立期の多摩川中流域/3武蔵一宮小野神社 図5-12 一宮大明神社(江戸名所図会) © 多摩市デジタルアーカイブ

【写真上】バルテノン多摩で行われた展示図録の表紙は、万平地蔵。【下】1834年と1836年に刊行された江戸の名所案内。万平親分が活躍した頃の小野神社の様子が描かれる。

目に入るだけでにっこり笑顔に、心もはずむ

名物店主がすすめる、美しく楽しい 「緑のある生活」



手に持つのは、植物を数種組み合わせた寄せ植え。センスがものをいう寄せ植えも、内納さんの得意分野だ。「盆栽をやっていたから、自然と身についたんです」。グリーンや白、繊細な植物の合わせ方が素敵。

一ノ宮に現れた 海外の世界観を感じる園芸屋

「それはラベンデュラだね。ラテン語の学名でラベンダーのこと」と教えてくれたのは、店主の内納重美さん。商品は、値段をつけずにブラボットの状態で店先に並べることもしばしば。「いくらなのか、どういう植物なのか。聞いてくれればなんでも答えますよ」。内納さんの背中を追いながら、店を見せてもらおうと原種シクラメンがたくさん並んでいた。秋から冬にかけて花咲くシクラメンを、初夏から育てているのも、内納さんならではの。「例えば、原種シクラメンのひとつであるヘデリフォリウムは今の季節に庭に植えれば雑草が生えてきて、適度に水分

を吸ってくれるから、腐りにくい。シクラメンでも年間通して育てられます」

一般の園芸店とは異なるアプローチで植物を育てている内納さんは、府中市出身。父親が武蔵野バラ会に所属していたこともあり、昔から植物と触れ合ってきた。その後も自身で知識や技術を深め、母親の地元であるこの場所で店を開くことに。内納さんが20代で開業した桜ヶ丘園芸は、盆栽屋から始まった。その後、サツキや蘭を育て始める。「今まで育てた中では、洋蘭が楽しかったですね。このあたりも昔はけっこう冷えたから、温室にカーテンをつけて育てました」

そんな桜ヶ丘園芸の植物は、世田谷の東京^{きねたか}砧花き園芸市場から仕入れている。以

前通っていた、蘭専門の市場・東京蘭葉が別会社と合併した市場だ。「砧花きにも出品していますが、大手の第一園芸でヨーロッパのバイヤーをやっていた方が立ち上げた はら園芸さんは、シクラメンが豊富」。そう言いながら取り出してきたのは、1冊の洋書。はら園芸からいただいたという、シクラメンの原種の本だ。暑さや寒さに耐えられる原種をはじめ、内納さんが扱うのもエネルギーを感じる植物が多い。「写真で見て知ったけど、イギリスのキュー王立植物園もいい場所だね。今後は花壇を作ってみようかな。手間だけど」と穏やかに笑いながら話す内納さんからは、海外のエッセンスを取り入れながら、植物への確かな愛情を感じられた。

聖蹟桜ヶ丘に住んでいるなら、ひそかに気になっていた人も多いはず。
サボテンや多肉植物、ナスにバジル。身近なものと、目新しい植物が混在
する緑にあふれた店舗を、深い知識を持つ店主がガイドしてくれた。

Interview : Nobuko Matsutake, Mizuho Iwasaki / Photo : Yufumi Omori

うちの
内納 重美さん

府中市出身。桜ヶ丘園芸を開業して約50年。盆栽からスタートし、蘭をはじめ多様な植物を栽培する。海外産などエネルギーで強い植物を好む。植物は学名で記憶している。



昔は温室もやっていたと話す内納さん。店舗の隣には自身の住まいがあり、家の裏側でシクラメンの原種などを育てている。店舗や作業場には、その時仕入れた植物が無造作に置かれていた。素朴な小さな花を咲かせているランペダーなどの鉢は、眺めているだけで心が和む。取材中、園芸の専門書を部屋の奥から引っ張り出し、熱心に説明してくれる姿が印象的。ホワイトボードには、植物の名前がラテン語で記されていた。

【市民クリエイターのお買い物SNAP!】

1 ロマンを感じる、飛行機型植物ホルダー

取材時に見つけた、可愛い飛行機にひとめぼれ!どこで製造され、どんな景色を見てきたのだろうかとロマンがふくらみ、購入しました。コックピットに鉢を入れられるので、植物を入れて楽しんでいます。(市民カメラマン 大森悠史さん)



テイクオフ!



2 オリジナルで作った、可憐な寄せ植え

取材後に興味を持って、たびたび足を運んでいます。ベランダのない我が家の事情に合わせて藤豆を水耕栽培にしてくださいました!その後、寄せ植えも購入。白い百日草、アイビー、サントリーナの3種で作ってもらいました。(市民ライター 岩崎 瑞穂さん)



桜ヶ丘園芸

一ノ宮の渡し跡のすぐ近くにある園芸屋。府中のガーデンショップ ユーに発注して作った石造りの建物は、天窓もついでいて、西洋風。購入後も育て方の相談にのってくれるため、常連になる人も多い。

📍 多摩市一ノ宮 2-5-7
🕒 9:30 ~ 17:30
不定休
☎ 042-338-5587

貸棚・シェアキッチン・レンタルスペース・カフェから成る複合交流拠点「タトネ」。ここを起点にセイセキで自身の活動を広げる“人”をピックアップ!



Profile 福井県鯖江市出身。聖蹟桜ヶ丘在住。大手メガネメーカーに勤務し、独立。現在は、オリジナルメガネメーカー「Peyewear」を立ち上げ、「P.」・「DOOZY」2つのブランドを展開。



タトネでの交流を楽しみながら メガネの魅力を発信したい

棚主 #1 吉川 公二さん (アイウェアプロデューサー)

「ブランドを始めたばかりだから、この小さな空間でも自分の店が持てると思ううれしかったです」と話すのは、貸棚を利用する吉川公二さん。メガネメーカーを退職後、64歳で立ち上げたのが「Peyewear」だ。アメリカのファッションを愛する吉川さんは、メガネにもその要素を落とし込んでいる。「メガネはその人のキャラクターを表現する大事なアイテム。昨今は、夏の日差しが厳しく、サングラスやメガネで目を守ることも必須です。メガネは“半円半商”とも言われていますし、ここ多摩市からメガネの啓蒙活動も行っていきたいです」。

上から2段目の吉川さんの棚ではミックスブルの保護犬がキャラクターのブランド「DOOZY」のメガネケースなどを販売。サングラス本体の展示も!

詳細はこちら▶



まちで
お金を
はずもう!

予算は ¥3,000! 聖蹟人はどこで買う?

聖蹟人のリアルなお買い物コースに密着! 宝探し感覚でお得なお買い物ができる、個性豊かな3店舗をめぐるしました。※価格は税込になります。

Text, Photo: Tamaki Onda

恩田 環さん

多摩市在住歴5年。セイセキZINE #2から市民クリエイターとして取材に参加。



『ミスター・ビーンズ』です!



「おむすびカフェくさびや」

古着スカート ¥1,500

テイクアウトおむすび・1個 ¥230

カフェながら古着コーナーもあり、店頭のラックは特にお買い得!トレンドのドット柄スカートをGET。もちろんおむすびも!

多摩市関戸 4-34-15

042-401-8988 月、火、木: 7:00 ~ 17:00

金: 11:00 ~ 22:00 土: 11:00 ~ 18:00

定休日: 水、第2・4木、日 <https://kusabiya.jp>

リサイクルショップ「ちいろばの家」

トートバッグ ¥530

レトロな食器や古本、古着など、掘り出し物でいっぱいの空間。ほぼ新品!?なトートバッグを発見して、即購入しました。

多摩市東寺方 1-16-3

042-372-3015

10:30 ~ 18:00

休: 祝日(土日の場合は営業)、

他、年末年始休業など

<https://www.chihiroba.tokyo/shop.html>

tokyo/shop.html



「原宿舶来食品館

聖蹟桜ヶ丘店」

輸入食品・3品 ¥736

世界の珍しいグルメに出会えるのでつい寄ってしまうお店です。台湾の豆菓子とドリンク、韓国のインスタント麺を購入。

多摩市関戸 4-72 VITA MALL SEISEKI 1F

042-373-8373 10:00 ~ 21:00

休: 館の営業日に準ずる <https://vitamallseiseki.jp>

Complete!

計 ¥2,996!

江戸時代から続く「踊り」で盛り上げる!

まちのイベントに現れる、 「かっぽれ」とは?

稽古場から、音源とともにハリのある元気な声が響いてくる。多摩エリアで
かっぽれの魅力を伝えている、小林伴子さんの活動に密着。

Interview : Yuko Miyake, Utaha Nishihama / Photo : Yufumi Omori

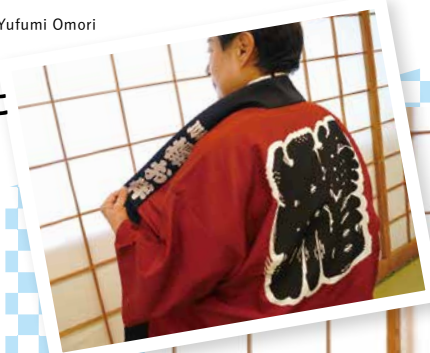
若い人も一緒に踊れるように 変化しながら継承する

「盆踊りもしたことがなかったのに、粋でカッコいい踊りにすっかり夢中になってしまいました(笑)」と当時を振り返りながら、「ラッキーかい楽喜会」代表の小林伴子さんは話す。

「かっぽれの発祥は諸説あると言われていますが、大阪府堺市にある住吉神社で五穀豊穡を願うための民衆踊りでした。そこから江戸に流れ、江戸時代の幕末期には『がんにんぼうず願人坊主』という僧侶たちによる大道芸パフォーマンスに。さらに、大道芸が禁止された明治時代以降は、花柳界でほうかん軽間(男芸者)の間で盛んとなりました」。小林さんは、10年ほど地元の道場に通い、名取・師範を取得。その後、本部(台東区三ノ輪)で稽古。1年後に多摩市で多摩かっぽれ道場開設の看板をいただき、「楽喜会」として活動していく。

「楽喜会」は、多摩市文化団体連合に加盟し、公民館での発表会、文化祭など多摩市のイベント、その他老人施設へのボランティア活動。さらに、本部の活動として東京マラソンの応援や日本橋・京橋まつり「大江戸活粋パレード」などに参加している。「かっぽれは大勢で踊るのも良いし、一人で踊るピン芸もあります。尻っぱしより(=着物のすそをまくり上げて、帯に挟み込み着付け)をすれば男踊り、すそを下げれば女踊り、浴衣1枚でいろいろ表現できるのが面白いですね」

伝統を守ることは重要だが、続けていくにはその時代の風も取り入れることが大切だと小林さんは話す。そのため演目の前には必ずMCを入れており、とにかく評判なのとか。「子どもの頃からムードメーカーでした。今でも人に元気を与えたいし、楽しませたいと思っているので、自分も心身とも



ともに、かっぽれの活動をしている橋本敏政さん。この日もふたりは、そろいの浴衣で登場し、息の合った踊りを見せてくれた。

に元気でいられるよう努めています」

小林さんの現在の目標は、伝統を守りながら誰でも楽しく踊れるように指導していくこと。「若い人たちにかっぽれのパレード踊りを教えて、一緒に多摩市中を踊り歩くことが夢ですね。できるといういな(笑)」

はずむ信念を持った小林さんの活動は、これからも続いていく。

江戸芸かっぽれ「楽喜会」

◎ 活動場所：聖ヶ丘コミュニティセンター

① 042-389-2211

◎ 関戸・一ノ宮コミュニティセンター

① 042-375-5566



かっぽれの踊りをご紹介します!

多摩市の秋の恒例行事・市民文化祭へ出演。さらに、亀戸のお祭りのパレードでも踊りを披露!

気になるあの人の履歴書 vol.2

このまちの“気になるあの人”に直撃取材するこの企画。今回は関戸のHUGSY DOUGHNUT(ハグジードーナツ)店主・まつかわさん。まちのあちこちで何かを始めてしまうまつかわさんには、どんな背景があるのでしょうか？

Interview, Text : Akira Andoh / Photo : KAEDEsign

Q1

お店作りのこだわりは？

A. 「あそぼう」をコンセプトに、みんなが集まる秘密基地のような場所を作っています。看板を外に出していないのも、のぞきこんで見つけてもらう面白さを大切にしているからです。

Q3

聖蹟桜ヶ丘って
どんなまち？

A. 新しいことを始めようとした時、「面白そう、一緒にやろう」となる空気がある。自然も都会もちゃんと混ざっていて、いろんな場所で働く人たちが住んでいるから、価値観の幅も広いです。

Q5

ストレス解消法は？

A. 陶芸や吹きガラス、この間はタロットカードを作ったりと、いつも何かを形にしています。頭の中でもややもするより、手を動かして形にしよう方が圧倒的にスッキリするのかも。

My LiFe's Hint

まつかわさんが影響を受けた人物は、聖蹟桜ヶ丘で、tak beansを営む松崎雄大さん。小さなコーヒー店を起点に、「まちにもっと面白いものがあれば」と手の届く範囲で動き続ける力が本当にすごい。2023年に「多摩川にメリーゴーランドがあったら面白いじゃない？」という思いつきから立ち上げた、「せいせきくらがおかMERRY GO ROUND」は、そんなお互いへのリスペクトから生まれた企画だ。



まつかわ ひろのり

Hironori Matsukawa

(HUGSY DOUGHNUT)



Q2

あなたのプチ自慢を教えてください！

A. 応援してくれる人がたくさんいることです。気づくとまわりに楽しい人がいて、一緒に何かが始まっています。まわりに恵まれているなって、しみじみ思います。

Q4

休日の過ごし方は？

A. 友達と集まってボードゲームをしたり、自分でビリヤニを作ってふるまったり。アクアブルーの50mプールで頭が空っぽになるまで泳ぎ続けることも。体を動かすこと、けっこう好きです。

まるで秘密基地のように 遊び続ける、ドーナツ屋

「ゲストハウスみたいに人がゆるやかにつながる場所に、すごく憧れたんですよ」。バックパッカーの経験を、まつかわさんは関戸の住宅街でかたちにした。お店に来た人同士が、そのままボードゲームを始めたり、一緒にご飯を食べに行ったり。お客さんなのか、仲間なのか。その境界が、ゲストハウスのようにやわらかく溶けている。「学園祭の準備期間って楽しかったですよ？あれがずっと続いている感覚なんです」

そんなまつかわさんの感覚は、お店の外にも染み出している。自転車でドーナツを販売したり、公園で芋煮会をしたり、河川敷でマルシェを開催したり。「100点を目指さなくていい。始める時に自分が思い描いたものより、誰かと一緒に作って想像もできなかった景色が目の前に広がる。それが、めちゃくちゃ面白い！」まつかわさんにとって、このまち全体が遊び場なのかもしれない。

「ワクワクは、 自分で作っていくのだ！」

まつかわ ひろのりさん

2014年9月、夫婦でドーナツショップ「HUGSY DOUGHNUT」をオープン。約50種のレパートリーから、季節により10～20種類を販売。「せいせきくらがおか MERRY GO ROUND」共同主宰。

HUGSY DOUGHNUT

<https://www.hugsycafe.com/>



今回の取材は、和泉多摩川河川敷の“シンボルツリー”の近くで行った。撮影時には、日光浴をしている人や、ピクニックを楽しむカップルも。「気になると、つい声をかけてしまうんです。あの方たちもどこに住んでいるのかなと(笑)」と、山本さんは気さくに話しかけていた。狛江には、古着屋やワイン屋などがオープンし、若いひとたちが増えてきているそうだ。

ち多 から の

から始めよう

ニートアップ

2016 年から開催し、今年
10 年目を迎える河川敷イベント
「多摩川リバーサイド
フェスティバル (TAMARIBA)」を
メインに、まちづくりイベントを
DIY で作り上げている
comaecolor (コマエカラー)。
代表である山本雅美さんとともに、
川との関わり方から
「TAMARIBA」の魅力、
今後の多摩川の可能性まで
語り合った。

Photo: Yufumi Omori

comaecolor

山本 雅美

×

京王電鉄 沿線価値創造部

北田 明

北田——多摩川沿いで見ると、狛江、和泉多摩川エリアは、聖蹟桜ヶ丘から一番近い下流エリアなので、いつもいろいろと学ばせていただいています。

山本——この辺りは、普段はすごく普通で。ランニングする人やサイクリングする人がいるくらいなので、聖蹟桜ヶ丘は商業施設もありますし、ちょっと違いそうですね。

北田——聖蹟桜ヶ丘では、お住まいの方から「子どもの頃は川は危険だと言われ、あまり近づかず暮らしてきたので、最近整備されてきれいになり、近づきやすくなって驚いている」という話をよく聞きます。

山本——なるほど。このあたりは、その昔は“川水浴”でにぎわっていた時代もあったようです。7年前は貸しポート屋さんもあったのですが、2019年の台風の被害で閉業されてしまいました。

北田——古くから川に親しんできたんですね。狛江といえば、「TAMARIBA」というイベントがありますね。まちのパワーがこの河川敷に集結されている印象です。

山本——ありがとうございます。「TAMARIBA」は、私たちcomaecolorという任意団体が始めたイベントで、今年で10年目。狛江駅前には保存林があり、水と緑のまちと呼ばれていますが、その魅力が市外の人にあまり伝わっていないように感じて。多摩川も近くにあるし、みんながマナーを守って楽

しめる空間を目指して始まりました。

北田——「TAMARIBA」は、来場者がここで1日どう過ごすかを準備して来て楽しんでいますよね。それだけ定着しているのもう文化だなと。

山本——そうですね、来場者と出店者や出演アーティストの一体感が徐々にできていく気がします。この空間をよくしようというみんなの想いに包まれていますね。

北田——お客さんも半分運営側になっていて、応援したい気持ちが芽生えていそう。それは運営主体が地域だからでしょうか。

山本——そうですね、基本DIYを大切にされていて、寄付で運営しています。そうやって支えてもらっているから、次のイベントにつながっていくのだと思います。前回、ボランティアスタッフに高校生が参加してくれて。その子は1回目から両親に連れられて来ている子で、それで関わりたいと思ってくれたようです。それはすごくうれしいですし、付随したサブストーリーが生まれていくのはいいですね。

北田——素敵です。山本さんは今後どのようなことに力を入れていきたいですか？

山本——多摩川にはまだまだポテンシャルがあると思っているので、この流域全体で魅力の再発見ができればいいですね。

北田——例えば二子玉川エリアとつながってみたい、いろいろ動いていきたいですね。

地域で育む、にぎわいづくり

“やってみたい!”をカタチにする。「企画創出ワークショップ」に迫る!

セイセキZINE#5(P14)でも取り上げた、せいせきカワマチオープンデ이의次のステップとして、仲間とともに自分の「やってみたい」を形にしていける「企画創出ワークショップ」を開催。参加者を募り、仲間とともにアイデアを出し合って企画を作り出していく様子を、レポートします!

STEP 1

アイデアから企画へ



2025年11月にキックオフ。参加者で環境・ドッグ・スポーツの3テーマで企画を考え始めました。参加者同士で自己紹介やアイスブレイクを行いながら、「なぜやりたいのか」「誰に届けたいのか」「せいせきカワマチで実施する意味は何か」を話し合い、企画へと構築していきました。結果、ドッグ・スポーツの2つのテーマで企画を具体化させていくことに。

STEP 2

企画実現までの道のり

今年の1月以降は、イベント実施に向けた準備期間へ。出店者募集や広報活動、さらに会場レイアウトの検討や関係者との調整など、実際のイベント運営に必要な準備を進めました。参加者それぞれが得意なことを担当し、一歩ずつ前進!

STEP 3

準備期間を経て、せいせきカワマチに生まれた2つのイベント

4月にはスポーツのテーマから企画された「ウェルネスフェスタ」、5月にはドッグのテーマから企画された「リバーサイドドッグフェス」が開催されました。両日とも晴天にも恵まれ、参加者の想いが詰まったイベントは大成。多くの来場者や出店者の皆さまに楽しんでいただけました!

〈ウェルネスフェスタ〉



〈リバーサイドドッグフェス!〉



ATTENTION

企画創出ワークショップは今後も開催予定です。
続報をお楽しみに!

誰でも参加自由!

「せいせきカワマチクラブ」をご紹介します!

多摩川河川敷芝生広場「せいせきカワマチ」を使いこなして、ひとりでは難しいことも他のメンバーと一緒に取り組むことでやりたいことを実現するためのコミュニティです。今回紹介した舞台裏もクラブメンバーを中心に実施しています。

メンバー同士のコミュニケーションを通じて、やりたいことのマッチングやオープンデイ(マルシェイベント)の企画を行っています。オンラインに加え、イベントの相互出店や交流会など、対面でのコミュニケーションも積極的に実施中です。

せいせきカワマチや
イベントに関する情報は、
聖蹟桜ヶ丘エリアマネジメントの
WEBサイトをチェック!



2030年までに
全館リニューアル!

京王聖蹟桜ヶ丘SC B館2階に 食エリアが拡大



今回紹介するのは…
京王聖蹟桜ヶ丘 SC
木村 優斗

せいせき
京王聖蹟桜ヶ丘ショッピングセンター

京王聖蹟桜ヶ丘ショッピングセンターは、開業 40 周年を迎えました。これまで地域の皆さまとともに歩んできた節目の年をきっかけとして、施設のさらなる魅力向上を目的に、2030 年をめどに全館リニューアルを進めます。ご来館いただくお客さまの「いつもの毎日」が少しでも特別な「うるおいのある毎日」になる施設を目指していきます。

その第1弾となるのが、B 館2階の一部エリアの改装です。今回の改装では食のエリアを拡充します。聖蹟桜ヶ丘周辺では大型マンションが増え、特に子育て世代を中心に駅周辺の人口が増えていることから、まだまだ食のコンテンツへのニーズが高いことが分かりました。そこで、菓子やスイーツの売り場の拡充を進めています。毎日来てもワクワクしたり、新しい発見があるようなフロアづくりを目指します。

現在、テナントさんは選定中ですが、トレンドのお店や地元の人気店などにもご出店いただければと思っています。売り場全体のデザインも一新しますので、乞うご期待です!



[写真上] 2030年をめどに全館リニューアルを目指している、京王聖蹟桜ヶ丘ショッピングセンター。[中・下] B館2階フロアの一部は6月から改装がスタート。来年1月下旬にオープン予定だ。話題のスイーツのショップが集まり、さらなるにぎわいが期待される。

市民クリエイター募集中!

京王電鉄と情報誌『BALL. (ボール)』を発刊するけやき出版は共同で、聖蹟桜ヶ丘のまちの魅力を取材・発信し、地域の価値創造を目指す取り組みの1つとして、市民参加型ローカルマガジンの発行を行っています。本誌は、聖蹟桜ヶ丘“People”ガイドをテーマに、毎月1つのテーマを決め、聖蹟桜ヶ丘エリアと所縁のある「人の想い」にフィーチャー。本誌では、有志の市民クリエイターとして聖蹟桜ヶ丘の“まちの魅力”を深掘りする方々を広く募集しています。

〔問い合わせ先〕

けやき出版

TEL : 042-525-9909 (平日 9 時～18 時)

MAIL : e-info@keyaki-s.co.jp

まちの掲示板

Night BEER Picnic開催! 暑さがやわらぐ夕方、気持ちのいい河原の空間で行うビールイベント。国内外から集めたクラフトビールと、キッチンカーフードを楽しもう!

日時:2026年8月24日(月)～30日(日) 17:00～21:00

場所:せいせきカワマチ

主催:BEER BULK J

連絡先042-202-0502

※雨天中止。中止の場合は、BEER BULK J の SNS でお知らせ。



編集後記

今号も多くの方にご協力いただき、ありがとうございます。#10のテーマは、『はずむ人』。体を動かす人、食事を作る人、植物を育てる人、さまざま『はずむ人』にお話を聞きました。取材をしていると、自然にワクワクと気分が上がり、心がはずむ。あなたの中にもきっとある、はずむ気持ちを大切に、この夏を楽しんでください!



過去号をすべて
アーカイブした
WEB 版もぜひ!!

市民クリエイターのみなさん

安藤 賛さん、岩崎瑞穂さん、大森悠史さん、恩田 環さん、佐藤寿子さん、西浜詩葉さん、松竹暢子さん、三宅祐子さん、吉岡さとみさん、KAEDesignさん

セイセキ ZINE とは？

セイセキ ZINE（セイセキジン）は毎月1つのテーマを決め、聖蹟桜ヶ丘エリアと所縁のある「人の想い」にフィーチャーする、市民参加型ローカルマガジンです。多摩市在住の有志の市民クリエイターを募り、セイセキ愛に満ちた誌面づくりをしています。



季節の野菜を味わえる、青木農園のランチプレート。 Photo：大森悠史